

# 海―レクイエム

井本元義

いく人も女たちが都からながれてきて  
最果ての島にたどり着く  
女たちは真西に沈む深紅の夕日を拝む  
彼岸の空から亡き愛する人の声が聞こえてくる  
あきらめはなぜこのように静かで美しいのか  
女たちは身を投げる  
難破船の破片がその海を流れていく  
伝説を信じない詩人はひたすら歩く  
西の果てにはなにがあるのか  
純白の砂漠はやがて黄金色の入日に輝き  
闇の緞帳が一瞬にして落ちる  
つむじ風が吹きはじめおぞましく唸り  
けものたちの嘲笑のような呻吟に混じる  
その先はまた砂漠と直角に墜ちる奈落

祈りはないただ見つめる  
その先はまた明るい空虚のような闇  
僕はたださざ波に誘われて来てしまった  
そしてここにこうして座る  
夕陽は巨大な一幕のいしえの悲劇を終え  
最後の火の玉が雲に隠れようとしている  
僕は祈りをするために来たのではない  
過ぎ去った日々には激しい希求や  
狂おしい祈りの時もあつたような気もする  
海から砂漠へ砂漠から海へ  
僕は乾いた体を引きずってただながれてきた  
そしていま  
陽が落ちて漆黒の闇が下りてくるその寸前  
雲の隙間に透き通った美しい水色が  
なつかしい色が一瞬よみがえる  
僕は吐息を漏らす  
ああそこから語りかけてくる僕の声を聞きたい  
亡き僕自身の魂の声を

## 交感（コレスポンダンス）

老いて耳が退化すると  
静寂の中に音を感じるようになった  
脳の裏側にしらない空間があるのがわかった  
あるときそこに音が流れた  
最初は砂漠の風と思つたが  
葉室の緑のそよぎのよう

楽符を見ていると  
突然シャープやフラットが踊りだし  
和音が一気に寄り添ってシンホニーになり  
初めての深遠を抜けていった  
存在しない音を奏でながら

公園を横切つて家路を急ぐ  
色づいたプラタナスの間に夕日の欠片が落ち  
池の面にかすかに光る  
親しい友人と別れてきたばかりなのに

顔も笑い声も何を喋つたかも忘れてしまった  
懐かしさだけが残つている  
もう友人たちと会うこともないだろう  
だいたい何もかも済んだのだ  
だれかが耳元でささやくような吐息が  
まだ残る草いきれにふつと消える

長い間一人で寝ている  
台所の匂いの消えないやわらかな寝床  
灯を消すと季節ごとに闇を感じる  
あきらめのような安らぎのような闇  
毎日見つめる漆黒は深まっていくだけ  
もう何を見る必要もなくなつた  
美しいセレナーデも聞きたいと思わない  
いつまでもこのままでじつとしておれる  
静寂の向こうに  
懐かしい闇と交感する音が訪れてくる